



『海洋連邦論』

—地球をガーデンアイランズに—

かわかつ へいた
川勝 平太

(国際日本文化研究センター教授)
PHP研究所 1600円



この著者の描く世界史は、面白い。プロローグ『地中海』の世界に似て、読者を新知見と差異を抱合した世界像へいざなってくれる。本書で言えばイスラムとヨーロッパの関係、コーヒーとティーの興亡などである。土地所有を基軸とした「陸の世界史」から、交

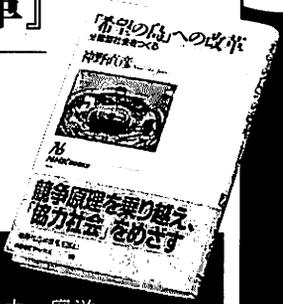
「海の文明」から見た
新たな世界像が刺激的だ

評者・加藤 哲郎
(一橋大学大学院社会学研究科教授)

易と文化交流を基軸とした「海の地球史」へという提言も、伝統史学への挑戦という意味では刺激的だ。著者が『文明の海洋史観』などで繰り返してきた視点で、本書ではオクスフォード留学体験やプロローグとの出会いと重ねて説明されており、わかりやすい。

「アジア」という地域概念がもとともアッシリア語で、「日の入り」を意味する「ヨーロッパ」の対語で「日の出」を意味し、日本に入ってきた時には「ヨーロッパは文明、アジアは野蛮」というオリエンタリズムのバイアスを伴ったことや、そこから生じる福沢諭吉の「脱亜論」でいう「アジア」と、岡倉天心が「アジアは一つ」という際の「アジア」では、南インドが入っているかどうかで空間イメージが異なるといった指摘も、ヨーロッパ史学に通じた著者ならではの読み込みで、学術的な香りがする。

「海の文明」と「地域の自立」から「西太平洋洋津々浦々連合」を構想するアイデアも魅力的である。だが、その構想がいったん「日本」にふれると、「福沢の『脱亜論』は日本史二千年における脱中国の過程の必然的帰結である」とか、「天皇の国事行為を考慮すれば、那須が新首都としての適格性を



『希望の島への改革』

—分権型社会をつくる—

じんの なおひこ
神野 直彦

(東京大学経済学部教授)
NHKブックス 870円



競争社会から協力社会へ
地方分権を核にした改革を説く

評者・田中 廣滋
(中央大学経済学部教授)

あろう。というのは、本書のなかで、二一世紀の初頭において、日本社会が克服せねばならない課題とその解決の方向性が地方分権の推進との関連で語られているからである。

鳴り物入りの積極財政がもたらした、巨額の財政赤字によっても、見通しが立たない経済社会の再生、さらに行方知れずの構造改革からの無力感などが国民的な深刻な悩みとなっている。

日本経済のパフォーマンスの悪さと比較して、スウェーデンが社会保障と環境対策を着実に進めながら、経済的な活力面でも優れた指標を残していることを紹介して、神野氏は、スウェーデンの成功例を希望の灯火として、新たな改革の方向性を指し示す。

本書では、経済改革では主要な柱に掲げられる競争社会の再生あるいは進化が、われわれにもたらしてきた負の側面に光を当て、環境問題の解決と社会保障の整備が実現される「協力社会」への転換の必要性が説かれる。

この「協力社会」の実現には、経済システム、政治システム、社会システムの統合されたシステム改革が必要になる。このシステムの改革の中核に、地方分権の実質を高める地方税制を含

本書の著者である神野直彦氏は、政府委員などでの活動を通じて、地方分権推進の指導的論者として活躍している。それだけに、神野氏によって構築された地方分権を推進する理論体系が一般読者にこのように分かりやすく解説されることは極めて意義深いことで



もつ」などと無雑作に述べるのは、學術的香りを損ない、読者を戸惑わせる。

網野善彦『日本』とは何か』や尾藤正英『日本文化の歴史』が明快に述べるように、「日本」のアイデンティティも「日本文化」も歴史史である。

著者の学んだプロトデルの方法からしても、まずは「日本」や「天皇」の時間・空間を問い直すことが必要な手続さだろう。それが本書では「地球は美しい。これは理屈ではない」と感性に訴えたいうえで、「富国強兵」から「富国徳」の流れで「力の文明」から「美の文明」への転換が日本の課題として語られ、「日本列島を地球の多島のミニチュアと見立てる」視座の転換で、国家政策たる「美しい国土、庭園の島」といふべき、世界に誇りうる

日本列島」という五全総に流し込まれる。著者の「日本」への執着は、ほとんど「日本は美しい、これは理屈ではない」といわんがばかりである。

だから本書は、小淵内閣「21世紀日本の構想」懇談会の裏話として読んだり、異なる発想を汲みとる知的体操の一つとして読む分にはそれなりに爽快なのであるが、学問的な日本論・日本文化論として読むと、毒になりかねない。評者としては、本書の面白さを強調した上で、丸山真男や加藤周一、網野善彦や尾藤正英との併読を勧めたい。著者の提言を、「海の世界史」も「陸の地球史」もありうるという立場で受けとめたい。既成歴史像の解毒剤が、「日本中毒」の麻薬に転化することは、珍しくないのだから。

めた財政改革が位置する。

神野氏の理論は、多元論的な色彩と財政中心主義がその特徴となっている。その議論の先には、重商主義からの経済思想の歩みを想起すれば、政治経済学としての経済学の復権が根底にあるように感じられる。

次に、経済自由主義的な標準的な理解に基づいて、神野氏の論点を整理してみよう。

今日、教科書的ともいえる議論の骨格は、市場経済の要請に耳を静かに傾け、経済社会では解決しない問題に対して、市場経済と連動して解決されるような方策を組み立てていくことである。現在日本の社会が直面する多くの問題の原因は、経済社会の行方を謙虚に見極めることなく繰り返された政策

と、それを実行する行政と政治の仕組みにあったといえる。経済メカニズムからの逆襲に国民が置かれているというところさえいえる。

この根本的な問題を解決する道筋は、市民、行政、企業のパートナーシップを確立することによってのみ可能である。神野氏が標榜する「協力社会」とは、政策が政治・行政を担当する一部の人の独断物とはならず、政策の立案と実行における競争が保証され、市民も政策面で協力して、責任が持てるパートナーシップが発揮される社会であるといえるであろう。財政の即効性という魅力の虜とはならず、日本を改革のエネルギーが国民各層に満ちあふれる、希望の島としたいものである。

ミネルヴァ書房

コンドラチエフ

波動のメカニズム

安宅川佳之著 ●金利予測の基礎理論 コンドラチエフの長期波動理論を論じ、具体的な経済問題に應用して21世紀を展望する。 三八〇〇円

東アジア経済と日本

西口清勝／西澤信善編著 激変する東アジア経済の全体像と各国の特徴を明確にし、アジア再生のなかでの日本の役割を考察。 三八〇〇円

日本公企業史

村上了太著 ●タバコ専売事業の場合 専売制度創設から、民営化に至るまでの経緯を跡づけ「民営化」の意義を世界のタバコ産業の動向も含めて検証する。 三五〇〇円

現代日本の株式会社

後藤泰二編著 日本経済の転換のもとで変貌する株式会社の現状を分析し、企業、株主、会社が抱える問題点を解説。 三五〇〇円

現代経済地理学

天田俊文／松原 宏編著 ●その潮流と地域構造論 第一線研究者の理論を詳解し、経済地理学の理論的展望を切り開く。 三五〇〇円

観光と地域経済

米浪信男著 今後の地域経済の活性化に観光が果たす役割を分析・検証し、地域政策のなかでの位置づけを明らかにする。 二八〇〇円

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL 075-581-5191 *価格は全て税別
http://www.minervashobo.co.jp/